

04・えっちな事ばっか考えてるのがバレて、優しくいいじめられて言葉攻め耳舐めされる

『03・夜中、民宿の部屋にふたりきり』からそのまま続き。

とある年の夏。七月二十七日（月）二十一時半ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

涼しく、心地よい夏の夜。

場所は、民宿内、現在主人公が自室として使っている部屋。

主人公と弥映は今、隣り合って座り、その距離はとても近い。

● 中央 至近距離

「ふふ」

〈主人公〉

「……あの」

主人公、弥映の言葉が信じられず、至近距離でぽかんと彼女を見つめる。

……まさか、日常会話で『セックス』という単語を聞くなんて。しかも、それを『しよう』と言われるなんて。

主人公は学校ではお堅い真面目女子で通っていて、周りからは、性の話題を嫌悪していると思われる。『エロい話NG』なのだ。

だから性的な単語を、知っている誰かの口から聞く事などなかった。あったとして、その話題に、自分は参加していなかったのである。

だがきつと、弥映はそうではないのだろう。

気軽に『しよう』と言えるような生き方をしているのだろう。

それを思うと、主人公はすごく悔しいような、苦しいような気持ちに襲われる。だが弥映は、次の言葉で、あっさりとその予想を覆した。

「しれっと補足する。遊んでいる女だとは思われないが、その誤解は当然の事のような気もしている」

ああ。別に誰でも誘う訳じゃないよ？

【少し間をあけてから。ごく当たり前のように言う】

でも、あんたいい子だし。顔も声も好きだなって思うし。

【※マークまでしれっと。】

『明日も会おうよ』と言うような、ごく普通の事に誘っているような感じで興味あるんでしょ？

【少し間をあけてから】

だからしょ？」 ※

主人公、弥映の言葉を、果たしてどの程度信じたらいいのかわからず、迷う。

ただ、今わかったのは、弥映が『誰でもセックスに誘う女』だったら。

少なくとも、自分でそれを認めていたら……主人公はすごく嫌だし、傷つくという事だ。

それは自分が『誰でもいい』の中に含まれるのが嫌だからだ。

つまり、主人公は——……弥映に特別だと思われないのだ。

『特別に思ってくれるなら』と思い始めているのだ。

だったら……。

〈主人公〉

「して、みたくない」

主人公、うつむいたまま、震える声で切り出す。

●中央 至近距離

「すごく優しい声で。主人公の言わんとすることがよくわからないので、続きを促す」  
ん？」

弥映はそんな主人公の顔を、優しく覗き込み、続きを促す。

〈主人公〉

「と言ったら、嘘だと思います」

●中央 至近距離

「甘ったるい猫撫で声で。主人公を強引に自分のペースに乗せようとしている」

うん。いいよ」

弥映はこれを、OKの言葉だと理解しかける。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「ダメ押しのように甘ったるくささやく」

えっちしょ」※

〈主人公〉

「……でも、それってどういう関係ですか？」

でも、そうではない。

主人公には、どうしても確認しておきたい事があった。

仮に『それ』をしたとして、その時自分達は、なんと呼ばれる関係になるのか。それだけは、はつきりさせておきたかったのだ。

弥映、主人公が奇妙な事を言うので、正面に向き直る。

●中央 至近距離

「少し驚いて。まさかそういった事を聞かれるとは思っていなかった」  
え……？

「それでも、驚いていなさそうな声音に戻す」  
不思議な事聞くね。

【思案して。『てーと』は『つて言うと』を略した形。

『つて言うと』に近いが、少し違って聞こえるように言う」  
これはどういう関係かってーと……。

【少し間をあけてから。答えを見つける】

『行（ゆ）きずり』みたいな？』

〈主人公〉

「それって、ワンナイトって事ですよね」

主人公、今度は顔を上げて、弥映を見ながら尋ねる。

これまた性的な言葉だ。

できるだけ柔らかく聞こえる表現を使ったつもりだが、それでも生まれて初めて使った。  
発音するだけで、声が震える。

●中央 至近距離

「しれっと。『その通りだよ』という感じで」

うん。ワンナイトって事。

『『よくない?』は『別にそれでいいと思わない?』という意味』  
よくない?」

だけど、弥映にとっては、普通に言える言葉であるらしい。

さらに言えば、普通にできる事なのかもしれない。

でも、主人公にとっては、普通に言える言葉なんかじゃないし、普通にできる事でもない。  
い。

だから……。

〈主人公〉

「……それは、嫌です」

●中央 至近距離

「声が笑っている。『そんな事言って、本当はしたいんでしょ?』という感じで。」

内心、断られたのかと思うショックを受けているが、まだ引き下がれない」  
えー？」

〈主人公〉

「私は……」

私は。付き合ってる人とか……その。……セツ、クス。しません。  
どんなに興味があつたって、しません。  
……でも」

だから言った。『それなら、応じられない』と。  
だけど、もし『そうじゃない関係』なら……」

SE1 主人公が弥映の手を握る音

【最初から最後まで流す】

主人公、弥映の手を握る。  
それから、もう一度顔を上げる。



〈主人公〉

「……意味、わかります？」

●中央 至近距離

「【驚いている。『意味』つまり、主人公の言いたい事はわかるが、それが信じられない】  
えっ、と。」

【なので、確認しようとする】

つまり、あたしがあんたの恋人になるなら、セックスしてもいいって事？

【声が少し揺れる。内心、心が大きく揺れている】

あんた、あたしを彼女にしてくれるの？」

〈主人公〉

「……」

主人公、黙ってうなづく。

これが主人公の出した結論だ。

どんなに『おかしい』と言われても、どんなに『ふしだらだ』と言われても、意見を変え  
るつもりはなかった。

●中央 至近距離

「少しだけからかうように。」

これは照れ隠しで、内心、変わった事を言うなと思っている。  
でも、主人公の人柄を感じて、悪くないなと思っている」

恋人セックスなら、してもいいんだ」

〈主人公〉

「うん」

主人公、頷きながら、つくづく意味がわからないと思う。

自分は今、弥映が『主人公とお付き合いします』と口約束さえすれば、今すぐセックスしてもよい。そういう意味合いの事を言っている。

だが、仮に約束を交わしたところで、それは果たして、どの程度の効力を発揮するのか。また、それはどの程度継続されるものなのか。

そして『付き合い合う』とは、セックス以外、具体的に何をして、どういう関係を結ぶものなのか。

それらについて何もわかっていないし、決めていないのに『付き合いおう』と提案してい

るのだ。

●中央 至近距離

「声が少し揺れる。普通っぽく振る舞っているが、内心、とても驚いている」  
そっ、か。

「長めの間をあげてから。本音が漏れる」  
あんたって変わってるね。

「少し間をあげてから。驚いているが、嬉しいと思っている。声が少し笑っている」  
こんな変な女に『付き合おう』とか言うなんて。

「長めの間をあげてから。  
『てつきり、普通に嫌がられて終わりだと思ったんだけど』と言おうとして結局やめる」  
でも。

「内心とても勇気を出す」  
嬉しいよ。

「ぼそっと」  
てか……すごい、嬉しいかも」

だが、なぜか弥映はこの提案を、否定的には受け取らなかった。

それほどまでに、今セックスがしたいのだろうか。  
それとも……。

いずれにせよ、今の主人公に、弥映の真意を知るすべはない。

弥映の手が伸びる。

主人公は、触れられるのかと思う。

だけどそうはならず、その手は代わりに、部屋のスイッチ紐へ向かう。

SE2 弥映が部屋の電気を消す音

【最初から最後まで流す】

部屋の電気が消える。

正確には、オレンジの光だけになった。

薄暗くなった部屋の中で、弥映が近づいてくる。

弥映、主人公の手を握り返して、顔の正面でささやく。

● 中央 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「甘く、ゆつくりと、ひそひそとささやく」  
いいよ。付き合お。恋人のえっちしょ？」※

弥映、そう言って、主人公の顔の左側に顔を近づける。

SE3 弥映の身体が動く音

【最初から最後まで流す】

【中央から左側へ移動する】

●中央 左寄り 至近距離

「額の左側にキスする」

ちゅ。

【嬉しそうに笑う】

ふふ。

【少し間をあけてから。左頬にキスする】

ちゅ。

【唇にゆつくり一回だけキスする。】

唇が濡れている事がわかる、水っぱい、ちゅぽっとしたキス】

ちゅっ……♡

【少し間をあけてから。

心底愛おしそうに。『唇熱い』は主人公の唇をさして言っている】  
はは。唇熱い。

【自分の唇を舌で舐めて】

れろっ……♡

【少し間をあけてから。『そういえばそうだった』という感じで】  
あたしがアイス食べてたからか。

【ここで一度、キスが終わったように油断させる。

それからもう一度、一回だけゆっくりキスする。やはり濡れた、水気の強いキス】  
ちゅっ……♡」

弥映、主人公の左耳に顔を寄せて、たずねる。

● ● 左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

【優しくささやいてたずねる】

初めて？」※

〈主人公〉

「……はい」

主人公、こくりと頷く。

自分の年齢では特におかしな事ではないと思うが、やはり恥ずかしい。

弥映もまた、特に何とも思っていないようだ。

むしろ嬉しそうにしている。

弥映、一度正面に戻り、主人公を見つめて笑う。

●中央 至近距離

「へーへーと、しれっと。聞き手に『嘘に決まってる！』と思わせる感じで。

実際は、主人公の緊張を和らげたい。

ここで、主人公が不安を感じそうな時には、弥映はいつも『あたしも』と同意している  
事がわかる」

あたしもー」

だけど弥映は、こともなげに同意する。

だから主人公は、思わず呆れてしまった。

『どうせ嘘を言っている。真に受けてはいけない』と。

でも、本当のところはどうだったのだろうか。

また主人公が、勝手な弥映像を作り上げて、誤解しているだけではないのだろうか。

〈主人公〉

「ほんとにー……？」

●中央 至近距離

「【優しく】

ほんとに」

弥映、再び主人公の左耳に顔を寄せてささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「【静かにささやく。これは本心である。

だが、肝心の『こういうの』がを指すのかは、ここでは不明である】

こういうの初めて。嬉しい」※



弥映、再び正面に戻り、今度はいとおしむような表情で主人公を見る。  
そのまま、唇がまた近づいてきた。

●中央 至近距離

「唇にゆっくり、三回キスする。

一回キスするごとに少し間を置く。

唇が濡れている事がわかる、水っぱい、ちゅぽつとしたキス」

ちゅっ………♥

ちゅっ。

ちゅ………♥」

弥映、また左側へ移る。

●中央 左寄り

「額の左側に軽く一回だけキスする。水気多めのキス」  
ちゅ。

「左頬に、軽く一回だけキスする。水気多めのキス」

ちゅ。

【左側の顎のラインを舐める】

れろっ……っ♡」

〈主人公〉

「……んっ……っ♡」

その時、弥映と目が合った。

主人公は恥ずかしくなり、

そうか。

こういう場面で『電気を消してほしい』と頼む人がいるのは、こういう気持ちになるからか……。

と理解する。

だから、本当は部屋をもう一段階暗くして、真っ暗にしてほしい。  
でも、今それを乞うのは『負け』よりも『逃げ』にあたる気がした。

この発想自体、たいがい負けず嫌いの思考だと思ったが、それでもかまわない。それに……部屋がもっと暗くなったら、弥映の顔も見えなくなってしまうと思った。

●左

「左耳のそばで笑う」

ふふ。

「嬉しい。自分のキスがうまくできているようで」

ちゅーしただけでびっくりしてる。可愛い」

そんな主人公を見て、弥映が笑う。

弥映、主人公の緊張を解こうと、優しくささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「※マークまで優しくゆっくりと、気遣うようにささやく」

大丈夫だよ。怖くない。

だってあたし達、付き合ってたんだから。

嬉しい事しかないよ。

『べたーっ』は擬音の『べたっ』。『ただ』とつなげて言う』

ただべたーっつくつくついて、あたしに寄りかかん？  
全部してあげるから。

【優しくダメ押しでささやく】  
ね」※

●左 耳舐め

☆「【※10秒※ 左耳を舐める。

舌で耳の穴の入り口そのすぐ置くくらいの浅い所を、ぴちやぴちや往復する。  
『えれえれ』は、舌を小刻みに往復させて、耳の穴の入り口を丁寧に舐めるイメージ】

☆

★ れろっ……♡ ぴちやっ♡ ぴちやっ……れろっ♡ えれえれ……れろっ♡」

●左 ※囁かないが、セリフ終わりまで小さめの声で※

「【主人公の反応が可愛くて嬉しい】

あは。すっごいびくびくしてる。

【声音を変えてドキツとさせる】

ほんとに初めてなんだね。可愛い」

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「指を、右耳の穴の入り口に軽く入れる。

それから弱めに、くるくる回転させて外側をいじめる」

これ好き？ ぺろぺろされながら、反対側の耳、こしよこしよされんの。

「くすくす笑う。主人公の反応が可愛くて、嬉しい」

ふふふふ。

【すごく優しく】

いっぱいしてあげんね」※

●左 耳舐め

☆「【※30秒※ 左耳を舐める。初めてしっかり舐める。

なのであまり激しくせず、時折吐息を混ぜながら舐める。

主人公の反応を伺うように入り口側をほじるイメージ」☆☆☆☆☆

★ んっく………♥ れろっ♥ ぴちや、ぴちや。ちゅぽっ………♥ ん………ふう、ふう

………。

んくっ………♥ んんっ………れる………♥ ぴちや、ぴちや………えれえれ………♥ ちゅぱっ

♥」

〈主人公〉

「……んんうっ……♡」

●左

「興奮して、荒く、ゆっくり三回呼吸する。主人公の反応がすごくいいので嬉しい」  
はー、はー。はあ……♡

「すごく嬉しい」

ふふふふ」

弥映、すでにとろとろになっている主人公の顔を、一度ちらりと見る。  
それから、また左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※マークまですごく嬉しい。からかっているというよりも、嬉しくて声が笑う」  
耳めっちゃ弱いね。耳かきも好き？

「少し間をあけてから。嬉しそうに同意する。主人公が頷いたので」  
あたしも好きい。

【再び、右耳の穴の入り口に軽く指を入れて、弱めに、

くるくる回転させて外側をいじめながら話す】

ねえ。耳の中になんか突っ込まれて気持ちいいのって、女の子の穴に突っ込まれて気持ちいいのと同じらしいよ？

【今までより一段階強く、右耳の穴の入り口に軽く指を入れて、

くるくる回転させて外側をいじめながら話す】

だからさ、これってそういう事だよね。

【ゆっくり、言い聞かせるように】

あんた、あたしに指もべ口も入れられて、気持ちよくなっちゃったんだね。

【優しくダメ押し】

いっぱいよくなっているよ」※

### ●左 耳舐め

☆「【※30秒※ 左耳を舐める。前回を踏まえて、今度は次第に耳奥まで入っていく。

時々主人公の顔を薄目で見て反応を確認しながら、丁寧に攻めるイメージ。

『えれえれ』は細かく静かに往復する感じ」☆☆☆☆☆

★ん……♥れろっ……♥えれえれ……れろっ♥ちゅぱっ♥ちゅぱっ、ちゅぱっ。

ちゅぱちゅぱちゅぱ……♥ちゅぱっ♥ぴちやぴちや♥れろっ。ちゅぱっ♥」

●左 ※囁かないが、セリフ終わりまで小さめの声で※

「実感を込めて。主人公の反応が可愛くて嬉しい」  
ほんと可愛い。

【左耳のふちに三回キスする】

ちゅ。ちゅ。ちゅつ。

【ふいに、左耳を吹く】

ふっ♡」

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく嬉しい。からかっているというよりも、嬉しくて声が笑う」  
あは。またびくーってした。

【※マークまで、今度は、ゆっくり言い聞かせるようにからかう】  
挿入されて出し入れされて。

感じちやうとこ、ぐぼぐぼ舌ではじられて。

【『気持ちいい』は『気持ちいい』の意味。

以後、これに関してはずべて同じ意味なので省略】  
気持ちいいね？



もっと気持ちいいの、覚えようね？」※

●左 耳舐め

☆「【※15秒※】左耳を舐める。耳穴の外側を、ぞりぞり丁寧にこするイメージ。

丁寧にやる分少し苦しく、時折吐息が漏れる」☆☆

★んう………んっ。れるれる………れるれる………れるれる………れーろ、れーろ、  
ぴちやつ………ちゅっ

〈主人公〉

「あぁっ………」

主人公、のけぞるほど気持ちよくて、無意識のうちに、弥映にしがみつく。

●左

「【余裕が出てくる。今の舐め方が、今までで一番反応が良かったので嬉しい。

『つかまんな?』は『つかまっっていいよ』の意味」

ふふふ。いいよ? ギューってつかまんな?」

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく嬉しい」

可愛い」※

SE4 弥映が主人公の背中を優しくとんとんする音

【最初から最後まで流す】

【セリフと『とんとん』するテンポが、可能な範囲で近づくように流す】

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく嬉しい」

よしよし。よしよし♥」※

SE5 主人公の身体が動く音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……あの。あのっ、もう……♥」

●中央 至近距離

「すごく優しい声で。主人公の言わんとする事がよくわからないので、続きを促す」  
んー？

「※マークまで優しく。『耳舐めが気持ちよくて、驚いているのかな？』と推測する」  
びっくりした？

ごめんね。あんた可愛いから、ちよつとやりすぎちゃった。※

「甘ったるく許しを乞う」  
許してくれる？」

主人公、小さく頷くと、今度は自分から顔を寄せてキスをする。

さっきはされるがままだったから、これが実質、初めてのキスだ。

自らの意志で、弥映としようと思ってしたキスだ。

自分から『付き合おう』と言い出したくせに、今初めて、弥映を恋人と意識した気がした。

●中央 至近距離

「ふいにキスされて、少し驚く」

ん……♡

「そのまま、『』を区切りに三回キスされる。つたない、間隔の短いキス」

ん。んっ。んうっ……♡

【すごく嬉しい。またこれが『許す』のサインであると理解する】  
ありがと。ふふふふ。

【優しくからかう】  
てか。て事は、まだされたいんだ？」

〈主人公〉

「……………♡」

主人公、黙ってうなづく。

●中央 至近距離

「照れ隠しに、ゆっくりとからかう。本当はすごく嬉しい」  
エロいなあ。あたしもエロいけど。ふふ♡」

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく嬉しい。優しくささやく」  
嬉しいよ。

【少し間をあけてから。

『もっとしてほしいっていうのは、反対の耳も舐めてほしいって事?』と確認している】  
反対もして欲しいの?

【ひととき優しい声音に変わって、ドキッとさせる】  
いいよ」※

SE 6 弥映の身体が動く音

【最初から最後まで流す】

【左から右へ移動する】

弥映、主人公のリクエストに従って、右耳側に移動する。

● ● 右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく。もう元の声に戻る」

こっちの穴も、初めて奪われちやおうね」※

● 右 耳舐め

☆ 「※15秒※ 右耳を舐める。

先ほどと同じように、耳穴の外側を、ぞりぞり丁寧にくするイメージ。

先ほど同様丁寧にやる分少し苦しく、時折吐息が漏れる」☆☆

★ふう……。んっ……。♥んっ。れるれる……。♥れる♥れーろ、れるっ♥ちゅ  
ぱっ……。ちゅぱっ……。ちゅぱっ♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しくゆっくり確認する。さっきと同じく反応がいいので。

『?』で区切られるが、『耳の外側の所を、舌でごしごしされるのが好き?』  
と質問したい」

ここ? 穴の外側んところ? 舌でごしごしされるのが好き?」※

〈主人公〉

「なんでわかるの……?」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく」

わかるよ。『もっとして』って、身体くっつけてきてるじゃん」

●右 耳舐め

☆「※30秒※ 右耳を舐める。」

基本は先ほどと同じように、耳穴の外側を、ぞりぞり丁寧にこするイメージ。

ただし先ほどよりも、自信を持ってしっかり攻める」☆☆☆☆

ふふ……♡ んっ。んくっ……ちゅぱっ♡ れろれろ、れろれろ、じゅるっ♡ れろれ

ろ……ずずっ……じゅるる……ちゅるっ♡ れろ♡ れろれろ♡ れろれろれろ♡

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく。『ね』は『ねえ』の略。」

ね。

【少し間をあけてから。

ここから※マークまで、ゆっくり、優しく言い聞かせるように】

今のあんたはね。気持ちよくなるのが仕事なんだから。

好きなところ、弱いところ。全部教えて？

あたしあんたの彼女なんだからさ。

彼女の事、嬉しくしたいって思うのは、当たり前でしょ？

ね？」※

SE7 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……………」

主人公、ここで一度身体を離すと、無言で弥映を見上げる。  
弥映はそれを『何か言いたげである』と理解し、顔を近づけて発言を促す。

●中央 至近距離

「額に一回だけキスする。主人公の緊張を解きたい」

ちゅ♡

〈主人公〉

「……………」

●中央 至近距離

「すごく優しく。」



聞いている側が『これから、言いづらい事も言い出せるかもしれない』  
と、思ってしまう感じで』  
うん？」

弥映、促すように左耳にささやく。

● ● 左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく。」

聞いている側が『これから、言いづらい事も言い出せるかもしれない』  
と、思ってしまう感じで』

教えて。

【少し間をあけてから。すごく優しく】  
全部。話していいんだからね」※

ここでフェードアウトして終了。